

【入選】

忘れっぽい天使

法学部 法律学科4年 岡村 郁人

パルマコンと呼ばれるその液体は透き通った紫色をしていて、僕たちは毎朝それをコップ一杯祭司様から手渡される。それを右羽、左羽の順番に掛けてから、残ったぶんを飲み干す。それで儀式は完了だ。

パルマコンを貰うために天使たちは祭司様の前に列を作る。天使の数は二十三人もいて、最後尾の二人は神殿からはみ出す位置に並ぶことになる。僕はいつものように列ができあがって、一番最後に並べるのを待った。

「ねえ。どうしてもいつも最後になろうとするの？」
日差しが差す中、前に並んでいる栗色の髪を持つ女天使が話しかけてきた。

「リリツか。おはよう。いやルーティーンなんだよ」

「ルーティーンって何？」

リリツは僕のあいさつには返さなくせして、気になったことを聞いてきた。

「ルーティーンってのはまあ、日課とか習慣とか、そんな感じの意味だよ」

「テオは言葉に詳しいのね」

「そうでもないよ」

「そんなことない。私テオの物知りなところ好きよ」

「僕よりも物知りの天使はたくさんいるさ。そんなことより君、あまり僕に付き纏わない方がいい」

「なんのこと？」

「とぼけるなよ。いつも僕の前に並んだり、お昼だって僕の隣にわざと座ったりしてるじゃないか。気にしてくれるのはありがたいけど、君は人気者なんだから、もっと他の天使と仲良くすべきだと思うけどね」

「みんなとも仲良くしてるわ」

リリツは僕が苛立っているのにも気付かず疑いのない微笑みを浮かべた。

「まあ、実際ありがたいのも本当んだけどね」

「あ、列が進んでた」

そう言ってリリツはパタパタと小走りした。

リリツと僕が銀色のコップを手渡された時、僕は彼女に本当のことを言ってるのかとも思ったのだが、彼女には真実こそ毒なのかもしれないと思うと、自然と話す気もなくなっていた。

「外で飲んでくる」

そう、僕が言うと

「どうしていつも外で飲むの？」

とリリツはまたも質問してきた。

「川に少し捨ててるんだよ。僕は羽がないから、みんなよりたくさん飲むことになるとおかしいよ、うで嫌なんだ」

「ついて行ってもいい？」

そう言ってリリツは僕の手をとった。

「恥ずかしいから」

「そう。ごめんなさい」

彼女の手をそっと払い除けて、僕は神殿を後にした。

川に来ると僕は周囲に誰もいないことを確認して、コップの中身を全て流した。みんな知らずに飲んでるが、あれは飲むと昨日までの記憶の大部分を忘れさせる効果がある。どうして祭祀官たちが天使にあれを飲ませたいのかは分からないが、僕はあれを飲むわけにはいかないのだ。

上流に行き川の水を少し飲んでから、僕はコップを返しに神殿に戻った。神殿の前にリリツの姿

を見つけた時は申し訳なさを感じた。

「リリツ。どうしてみんなと行かなかったんだ」

「待ってたのよ。言いたいことがあって」

「言いたいこと？」

「うん。あのね、あなたはたしかにみんなと違って翼がないけれど、でも私たち同じ天使よ。別にみんなと変わらない。それはみんなも分かっていると思う。うん。うまく言えないんだけど、あなたは翼がないことなんて気にしなくてもいいのよ」

リリツはやや熱がこもっているが、いつもの優しい口調だった。

「ありがとう」

僕には秘密の場所があった。それは西の果てにあるところどころヒビのはいつている崩れかけた石小屋で、以前は何に使われていたのか分からないが、小卓や椅子、筆筒などが残っているのをある日発見して以来、僕が自由に使っていた。

それにしても『みんなと変わらない』か、と僕は思った。彼女が言う通り、みんながそう思ってくれているのは知っている。でも僕は少なくとも普通の天使じゃない。例えば天使たちは「愚かな人間たち」というようなフレーズをよく使うが、僕は愚かではない人間を知っている。人間は天使なんかよりもずっと賢い。天使には歴史がないが、人間にはそれがあるからだ。人間の歴史にも一定の規則性はあるが、少なくとも天界よりは様々な事象に囲まれており、その情報の長期保存に成功

した彼らは、無限の寿命があっても何も起こらない環境にいる天使たちよりよほど、たくさん知識を持っているのだ。

僕は筆筒の二段目から紙の束を取り出した。人間の書物を真似て作ったものだった。ここには僕が天界から覗き見た、人間界のさまざまな情報が記録されている。

僕は彼らの描く絵も好きだった。画家たちはたくさんさんの天使の絵を描いた。中でも好きなのがパウル・クレーの忘れっぽい天使の絵だ。パルマコンを飲んで昨日のことを忘れてしまう僕の仲間のことを想起させる題のその絵は、しかし僕の知っている天使とはずいぶん違った風貌で描かれていた。クレーは天使にああい風な、概念が霊体かのようなイメージを持っていたのだろうと思う。でも僕が知る本物の天使は肉体があり、性交ばかりしていた。僕はクレーの描く天使の方が本物の天使よりずっと好きだった。彼の描く天使の方がずっと天使らしい。僕は紙に模写した忘れっぽい天使をじつと眺めた。これを書いたときクレーはどんな気持ちだったのだろう。なぜそんなことが気になるのかと言ったら、少しくらい僕と似た気持ちだったんじゃないかと思ったからだ。つまりクレーが天使に抱いていたのと近いイメージを僕は人間に抱いているのだった。

腰掛けようと椅子を見ると、昨日より位置が少しずれているような気がした。とつさに窓の外を見るが、そこには誰の気配もなかった。紙束は見られたらどうか。見られていたとしたらまずいという気がした。祭祀様がパルマコンを飲ませてわざわざ記憶の連続を断っていることと僕の紙の記録は、互いに反発する事実のように思えてならなかった。僕は紙束をパンツのゴムにかませて服の中に入れてと外へ出た。隠し場所を変える必要があった。

薄暮れの広場にはほとんどの天使たちが集まっていた。そこにはリリツの姿もあり、みんな地べたに腰掛けて何かを待っているみたいだった。青い草が風で揺れ、誰かがあげている風が気持ち良さそうに空を泳いでいるのが見えた。人間ならばッハの旋律を連想するような風景だった。でも自分がそういう場所にいる実感を、僕はいつも持てないままだった。

リリツがこちらに向かって大きく手を振っていた。どうやら僕を呼んでいるみたいだ。穏やかな傾斜を下って僕は広場へ降りた。

「遅かったじゃない」

「遅かったって……今日は何かある日だったっけ？」

「え、知らなかったの？」

リリツは驚いたというように口元に手を当てた。

「今日は黄昏の日だ」

そう教えてくれたのはたしかハルトという名前の天使で、接点はあまりなかった。リリツとはたまに一緒にいるところを見かけるが、僕は彼の鋭

目つきが苦手で鉢合わせになるのを避けているところがあった。彼に見られると僕の抱えている秘密が全て見透かされてしまうんじゃないかという気がしてくるのだ。

「ああ、今日は黄昏の日だったか。すっかり忘れてたよ」

黄昏の日とは一年で最も美しい日の入りが見れる日のことで、夕方みんなで広場に集まるのが習わしになっていた。なんでもその時間は神様が天界上空を通過しているらしい。

僕はハルトに礼を言つて愛想笑いをしたが、彼の表情が動くことはなかった。

「お前、さっきまでどこにいた」

ハルトはじろりとこちらを見た。

切長の目が鋭く僕を見つめている。恐ろしくて目を逸らせないまま、僕は黙り込んだ。

遠くで歓声が上がリ、僕たちは同時に西を向いた。

そこには一面黄金に染められた、雲ひとつない空があった。

「すごい綺麗……」

とリリツが漏らした。

確かにその光景は美しかった。金のカーテンによって仕切られた空の向こうには本当に神様がいるのだろうか。

ハルトもさっきのことは忘れたように金色の夕焼けに圧倒されていた。他の天使たちもみな、広場に棒立ちになってただただ天を仰いでいた。しかしハルトはすぐに我に返ったようで、耳元で「お

い」と囁いた。彼の細い顔に黄色い影が落ちているのが見えた。

ハルトの呼びかけになんと答えていいか迷っていると、坂の上から五、六人のローブを纏った祭祀官たちが降りてくるのが見えた。どういことだろう。こんなところに彼らが来るのが普通じゃないことだけは確かだった。

祭祀官が広場を歩いているのを見て天使たちの間に動揺が伝播していくのが分かった。その時僕の頭には最悪の予感がよぎっていた。

「祭祀様よ。どうしたのかしら」

とリリツも心配そうに呟いた。

僕はハルトを見上げたが、彼はただ黙っていた。

「こっちに来るわ」とリリツは不安そうに言った。ゆっくりと歩み寄り祭祀官たちを、僕はその場で息をのんで見守ることしかできなかった。金のカーテンの向こうにいるかもしれない神様に祈った。

祭祀官たちは僕たちの前で立ち止まった。どうやらあの先に神様はいないみたいだ。

「テオくん」

と一番年寄りの祭祀官が僕の名前を呼んだ。

「なんででしょう」

僕は平静を装うためなるべく爽やかに返事してみせた。

「緊張しなくてもよろしい。怒ったり罰を与えたりはしないと約束するから、質問に正直に答えて欲しい」

「はい」

毛穴から変な汗が滲むのを感じた。服の中の紙束が濡れて、ダメになってしまわないかが心配だった。

「よろしい、まずは君が今日のいつ頃ここに来たのか教えてくれるかな」

「ええ、僕は今さっき、ほんの五分ほど前にちょうどこの広場に来ました」

「では、広場に来て最初に会ったのは」

祭祀官はリリツの方を見る。

「はい、私と、あとハルトもです」

そう言つてリリツは一步僕の方に歩み寄った。

「では、リリツくん、ハルトくん、さっきのテオくんの言ったことに間違いはないかな」

「はい、間違いありません」とリリツ「間違いありません」とハルトがそれぞれ応じた。

「では次の質問だ。ここに来るまで君はどこで何をしていたのか、聞いてもいいかな」

「はい。僕は湖の方で釣りをしていました」

と僕は嘘を言った。心臓がどくどく鼓動していた。天使には人間ほど嘘を吐く習慣がないのだ。

「それを見た者は誰かいるかな」

「いません」と僕が答えようとしたその矢先、しかし僕が口を開くより前にハルトは「俺が」と申し出た。

僕は驚いてハルトの方を向いた。ハルトはまっすぐ祭祀官の方を見ていて、リリツはそんなハルトをぼうっとした顔で見ている。彼女も驚いているのだろうか。

「それはいつ頃かね」

「昼過ぎに湖で釣りをしているテオを見ました」
「なるほど」と祭祀官は呟いてから「では、こちらの勘違いだった。すまない。時間をとらせたね」と言った。そしてゆっくりと踵を返し、それに倣うように他の祭祀官たちもぞろぞろと立ち去っていった。

僕は何が起きたのか上手く整理できず、ただ果然と彼らの後ろ姿を見送った。

「西の小屋に居たな」

しばらくしてハルトが僕に尋ねた。みんな流石に脱力して地べたに座り込んでいた。

「どうして庇ってくれたんだ」

観衆は適度な距離を保ちながら僕たちのことを見ているようだった。異物に対するような白い目で見られているのが分かる。それも仕方あるまい。祭祀官が天使に直接関わるなんて異例中の異例だ。

「二人とも人間みたいに嘘を吐くのね。私クラクラしちゃったわ」

リリツはさっきのがかなり堪えたようで頭を押さえていた。

「とりあえず場所を移そう」とハルトが提案した。あんなことがあったのに彼は冷静だ。人間界でも出世できそうなタイプだなと僕は無意味なことを考えた。しかし場所を移す前に僕にはやるがあった。

「小屋に用がある」と僕は言った。

質問の最中、石小屋の壁に自作のカレンダーがあったのを思い出したのだった。十二ヶ月の日付と曜日だけが記載された簡素なものだったが、それでも人間たちの過ごす時間を理解するのには役立った。

「危険だ。なんのために助けたと思ってる」

「なんのために助けたんだ」と僕はハルトのことを見つめた。そんなこと頼んでない、という意味を込めたつもりだった。

ハルトは一瞬僕の目を見据えた後黙って下を向いた。

「今日はダメだ。せめてほとぼりが冷めてからだ」

「……わかった」と僕は渋々了承した。救つてもらった身だ。そのくらいは我慢して然るべきだろう。

「いいじゃない、行きましようよ！ 思えば三人で話したことなかったし、良い機会じゃない」

とリリツはいきなり僕とハルトを同時に抱き寄せた。

「だめだと言っているだろ」

ハルトは暗めたがその口調は思ったほど強くなかった。僕は好気かと思いい「今日行かなかつたらカレンダーは先に没収されてしまうかもしれない。それに、僕も少し君と話してみたい」と言った。

少し間があった後、ハルトは諦めたようで「分かったよ」と言った。

石小屋へ向かう川沿いの上流に着く頃には、空

には月が登っていた。暗い上にこちらの地面は大きな石や窪みも多く歩き辛い。

「石小屋で何をしていたんだ」

「だから、人間を見てたんだよ」

「なぜそんなことを」

「好きだからだ」

「人間が！？ あんなのが好きってテオおかしいわ」

三人は息を切らしていたが歩きながらの会話を続けた。話していないと、なんとなく心許ない気がした。

「なぜ人間が好きなんだ」

「質問ばかりだ」

「お前に羽がないからか」

「……そうかもしれない」暗くて二人がどんな表情をしているのが見えなかった。「それだけじゃない。人間の知識に興味があるんだ。彼らは知識を保存することに長けている」

はん、とリリツは鼻で笑った。

「知識なんかあっても、人間は争いばかりして互いに殺し合ってるわ。私嫌よ。そんなの醜いわ」意外な反応だったが僕は何も言えず黙っていた。

「人間は可哀想かもしれない」

そう言ったのはハルトだった。こちらとも思いがけない反応で、僕は思わず「なぜ？」と訊ねた。

「天使にも負傷はあるが、飢餓や出産はない」

とだけハルトは言った。

僕は、僕以外にも人間についてこのような種類

の考察を持っている天使がいることに驚いた。今まで人間についてあれこれ考えてきた僕だから、ハルトの短い言葉が天使という存在に対する疑問に繋がっていることがすぐに分かった。リリツもハルトの言葉が意外だったのかただ黙っていた。しかしすぐに「あ、あれじゃない？」と前方を指差した。

指さす方を見ると大きくていびつなシルエットがぼんやりと浮かびあがってきた。僕たちの目的地だった。

石小屋の中は薄暗かった。僕は先の中に入りランプを灯した。そしてみんなに入るように促した。

「こんなものまであるのか」とハルトはつぶやく。

「あれ？ リリツは」

リリツの姿が見えない。小屋の前までは一緒だったから迷子ということはないだろう。

「今さっき崖の淵から下界を見るとか言って勝手に消えてしまった。呼び戻そうか」

「まあいいよ。どうせ夜は暗くて下界なんか見えないんだから。すぐ戻ってくる」

それにしてもハルトの発言もだが、リリツの間嫌いがあそこまだったことも意外だった。普段温和なリリツがあからさまに人間への嫌悪感を露わにしているのを思い出し、僕はここに連れてきたことを少しだけ後悔した。

「それで？ あったのか、カレンダーとやらは」

「ああ、ごめん。これだ」

僕は壁に立てかけていたカレンダーを折りたたんでポケットに入れた。

「あったならさっさと退散しよう」

そうだなといういかけて僕はふとあることに気付いた。

「……なあハルト。君は記憶について何か考えたことはあるか」

「記憶。儀式のことか」

「知ってたのか」

僕は驚いて声をあげた。

「ああ。朝の儀式で天使たちは昨日までの記憶の大部分を失うようにされている」

「知ってて、それを受け入れてるの？」

「ああ。記憶がなくて困ったことはない」

「でも今日の記憶がなくなれば僕たちがこうして話したことも思い出せない。記憶がなかったら僕らがこんな風に話すことは二度とないだろうよ」

僕は言いながら哀しい気持ちになった。

ハルトは考えるように下を向いた。

「朝の儀式で渡される薬を飲まなければ記憶は消されない」と僕は言った。

ハルトはずっと俯いていたが、それを聞いて

ハツと顔を上げた。それと同時にハルトの背後の壊れた扉から、リリツが中へ入ってくるのが見えた。だいたい頑張ったようだが、案の定何も見えず諦めて戻ってきたのだろう。よく見ると両手に何か持っているようだ。そしてそれを持ち上げて——それは岩だった。彼女の顔の半分以上

ある大きな岩。それを持ってこちらに、ハルトの

背中にとんどん近づいてくる。ハルトが何か言っているがよく聞こえなかった。リリツはちょうどハルトの頭の上で腕を大きく振りかぶった。一体何が起きているんだ。思考が追いつかない。ハルトが心配そうに僕の顔をのぞき込んでいる。時間が引き延ばされているみたいに一瞬が長かった。「後ろ」と僕は叫んだ。ハルトが振り返ろうとした直後、リリツはその巨大な塊をハルトめがけて思いっきり振り下ろした。

ガツンという鈍い音がして、ハルトはその場に倒れた。しばらくして鮮血が灰色の石の床に広がっていくのが見えた。

「何してるんだ！」

やつと脳の処理が追いついて声が出た。

「ごめんなさい」と言ってリリツは座り込んで泣き出した。

僕はすぐに倒れているハルトに駆け寄ったが、既にこと切れていた。

リリツは「ごめんなさい」とうわ言のように繰り返していた。

「なぜこんなことをした！」と僕がどなっても謝るばかりで何も分からない。

しばらく待ったがリリツは泣きやまなかった。

そしてずっと「ごめんなさい」と言い続けていた。僕は少しだけ彼女が哀れに思え「事情があったのは分かるから、なぜやったのか理由を言ってごらん？」と背中をさすってやった。

「キスして。キスしてくれたら言うわ」とリリツは顔を手で覆ったまま涙声ですがるように言う

た。

「馬鹿を言うなよ。理由を教えてみなって」

とさとしたが今度は「キスして」しか言わない。

「分かった。キスするから、したら理由を言うんだよ」と僕は言っ、彼女の伏せている顔を持ち上げて、その涙で濡れた顔にキスをした。

しょっぱい味と一緒に彼女の唇の感触が伝わってくる。腕を僕の首に回して、今度は舌を入れてきた。僕が受け入れるや否や彼女は僕の口に何かを流し込んだ。僕はそれを飲み込んでしまった。驚いて彼女の顔を見たが、彼女は目を瞑ったままだ。顔を離そうと思ったが首に絡む彼女の腕のせいで離れられない。徐々に視界がブラックアウトしていくのを感じ、それから僕は深い眠りについてた。

夢を見た。

僕は人間で、神学部に通う22歳の学生だった。車に乗ってどこかの海沿いを走っていた。静かな夜だった。自分がどこに向かっているのかも分からず、ただ誰もいないまっすぐな道を飛ばしていた。

「ねえ。神様って本当にいるのかしら」

助手席の誰かがそう言った。

「どうして？」

彼女は僕の恋人なのかもしれないと思った。でも本当は全然違うのかもしれないなかった。

「私時々不思議な夢を見るの」彼女はなにか大切

なものを扱うように、一言ひとことを発していた。「人間のような姿のそれには羽が生えているのよ。彼らは食べる必要も傷つくこともないの」

僕は言葉が見つからず黙っていた。

「みんな夢のような生活をしているけど、どこか満足できていないのよ。ねえ私たちと一緒にと思わない？」

「僕は毎日大変さ。明日だって提出しなきゃいけないレポートがある」

僕はなぜか彼女にわざときつく当たっているようだった。

「ねえ、あなたってそういう存在を信じる？」

何かを訴えかけるような声だと思った。

「夢の話だろ」と僕は言った。不思議な気持ちだった。「いたらいいなとは思うよ」僕は少し考えてそう付け足した。

「うん。いたらいい」

その後も彼女は「いたらいい」と何度か繰り返して呟いていた。

「なにかかけようか」

僕は彼女にグローブボックスを開けるように言った。彼女はその中からCDを一枚取り出してカセットした。ステレオから切ないギターの音が流れ出した。次第に車内は無言になり、エンジンの音とアメリカの音楽だけが冷たい夜に残されていた。

「どうして今日も列の最後になろうとするの？」
天気の良い朝。いつもの儀式。普段通り列に並んでいると突然、前に並ぶリリツが話しかけてきた。

「たしかにどうしてだろう」

しばらく考えたが理由は見つからなかった。

「きつとルーティーンなのね」

僕は彼女がらしくない言葉を使うのが面白くて思わず笑った。

「そうだね」

彼女の栗色の髪は日の光を受けてまぶしく輝いている。綺麗だなと思った。

「ところでハルトはどうしてるかしら」

「ハルト？ 誰のこと？」

「あら？ 忘れちゃったの？」リリツはクスクスと笑う。「じゃあ石小屋のことも覚えてないの？」

「なんだよ石小屋って」

「そう。忘れっぽいのね」とリリツは言った。

コメント

「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」というフリードリヒ・ニーチェの有名な言葉があります。この作品は自分が天使を見ようとしている時、天使も崖の淵からこっちを覗き見ていたら面白いな、みたいな感覚で作りました。楽しんでもらえたら嬉しいし、その人なりの何かを感じ取ってくれたらもっと嬉しいです。

最後まで読んで頂きありがとうございます。